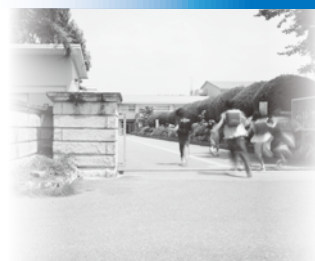




No.4 2021.2.3
 岩手県教職員組合
岩手教育総合研究所

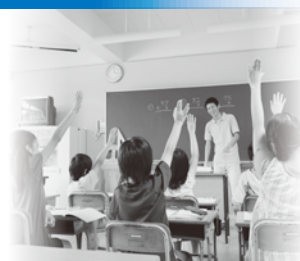
〒020-0022
 岩手県盛岡市大通一丁目1-16
 岩手教育会館4F 岩手県教互センター内
 TEL/019-623-4432 FAX/019-652-9535
 E-mail:j.sato8252@gmail.com



リレー特集

岩手の学校に期待する

～コロナ禍を超えて未来へ～



キャリア教育から考える“社会に開かれた学校”



高橋 宏 昇

(ジョブカフェいわて センター長)

略
歴

1979年 テレビ岩手入社
 1988年 青年海外協力隊員としてモルディブへ
 1993年 県立高校非常勤講師、盛岡タイムス記者を
 経て岩手日報社入社
 2016年 同社を退職しジョブカフェいわてセンター長
 JICAボランティアを支援するいわての会事務局長

コロナ感染症の流行がなかなか治まらないなか、朗報が飛び込んできた。2021年度の国の予算編成で文部科学省と財務省が公立小学校の1学級の定員を2025年度までに35人以下に引き下げることで合意した。本県でも独自に進めてきた少人数学級。“コロナ禍がもたらした”という解説もあるが、いずれ高いと思っていた山が動いた。今回の災禍、少人数学級だけでなく、これからの学校はどうあるべきかを考えそれを実行するいい機会ではないだろうか。

私が仕事をするジョブカフェいわては岩手県や岩手労働局、盛岡市などから委託され、就業支援事業などを行っている。対象はおおむね45歳まで(2020年度から就職氷河期世代の支援も加わり年齢制限が10歳引き上げられた)の生徒、学生、求職者、在職者だ。来館利用者に、出前セミナーでの受講生らを加えた2019年度のサービス利用

者数は過去最高の6万8千人。利用者のなかで一番多い年代は20代前半で約5割を占める。

来館者で多いのは就職活動に初めて取り組む大学生。インターンシップ参加のための企業のマッチングや提出書類の支援から始まり、就職活動の進め方、エントリーシート作成、面接やグループディスカッション対策へと進む。意識の高い学生は3年生になるころから大学のキャリアセンターなどを利用して動き出す。自己分析や企業研究を重ね、それぞれのキャリア観をつくり、応募企業を絞っていく。

しかし、多くの学生は就活ルール(経団連は2021年卒以降の廃止を決定、政府主導でルールは当面の間維持)で企業広報が解禁となる3年次の終わり、3月ごろから就活をスタートさせる。それまで就職について考える機会をあまり持てなかった学生は、志望企業を決めかね、「有名や安定」以外の選択基準にも気付かないまま就職活動を続

け、苦勞する例も見受けられる。

2011年、中央教育審議会はキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、初等教育から高等教育まで系統的・組織的に推進している。しかし、就活を始めた大学生と話す機会が多い私には、これまでのキャリア教育を高く評価することはなかなかできない。

半世紀前の話になるが、私が子どもだったころキャリア教育はなかった。ただ、家は床屋で近所には米屋、肉屋、青果店、豆腐屋、豆屋、煙草屋などの商店があり、肉屋の裏庭では店員が鶏を絞めていた。鉄工所や製材所もあり、工具は身近な存在だった。父親は裁判所関係の公務員で、仕事場を訪ね、仕事内容について聞かされることもあった。そんな暮らしも中学までのこと。高校生になり進学校に入ると受験勉強に部活動が中心となり、職業や仕事を考えたり、地元の会社や企業を知ったりする機会は全然なくなった。

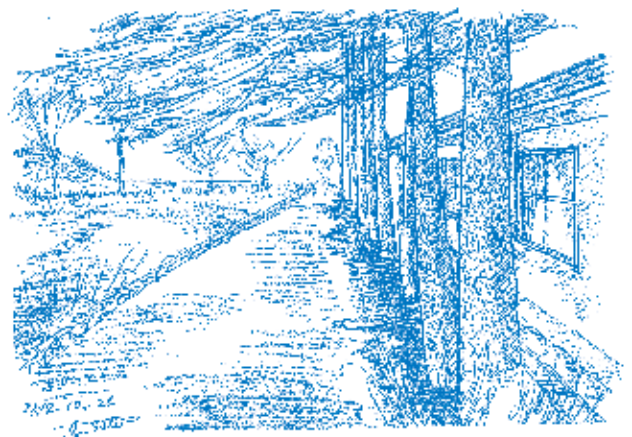
岩手県のほか、経済・業界団体、教育・金融機関、労働組合などで構成するいわてで働こう推進協議会（会長・達増知事）は2020年8月6、7の両日、岩手教育会館で「未来のワタシゴト創造プロジェクト」というワークショップを実施した。ジョブカフェいわてが企画・運営を担当し同年で3回目となる行事には県内の進学校や専門高校などの高校生45人が参加。大学生がファシリテーターとなり、8班に分かれて地元企業の社会人と自分や地域の将来を考えた。今回のテーマは「〇〇が高校生の就きたい仕事ランキング1位になるためには」。蔵元や岩谷堂ダンスの職人、ガス会社、建設会社、起業家、マスコミなど地元企業の若手社員ら8人の話を聞きながら、高校生らしいアイデアを考えた。

生徒たちがユニークなアイデアを考える過程を聞くのも面白かったが、彼らの参加後のアンケートを読み、考えさせられた。「岩手にはさまざまな仕事があることを知ることができ良かった」「働くことのリアルを知るきっかけになりました」「岩手にも全国に通じる企業があることに驚きました」。2日間という短い期間だったが、地元企業の

情報や知識を得ただけでなく、働くことや仕事について考える機会になったようだ。

県内では高校生と地元社会人らが交流する「釜石コンパス」、小中高生が社会人と触れ合う機会を提供する「未来図書館」などが活動している。文科省の「社会に開かれた教育課程」の事例紹介で一番に登場する大槌町。大槌学園ふるさと科は、地元商工会女性部長が「学校支援地域コーディネーター」として学校の一室に常駐し、学校と地元企業、地域住民との橋渡し役をしていた。県立大船渡高校の「大船渡学」は、生徒一人一人が自分の興味のあることを自分自身で調べる。教師はそうした生徒にアドバイスをする。目指すのは生徒の“自走”だ。教師の力ではなく「地域の力を利用し、学びは自分で」。そんな先進事例が生まれ、活動が続く岩手県。起点の一つは東日本大震災だったと思う。

少人数学級の導入が決まったものの、小学校で教えるのは従来の教科に加え英語に道徳、そしてプログラミング。ICT（情報通信技術）教育でパソコンも必須、教職員の働き方改革も求められている。教員が子どもたちの家庭生活や社会活動まで考え、その成長に一定の責任を負う“今の学校”は限界に来ているように思う。いろいろ抱え込み過ぎた内向きのベクトルを外に向け、地域住民ら学校外の人と協力し役割分担をする。そんな“これからの学校”が求められているのではないだろうか。学校が声を上げれば、地域に暮らす人々は必ず手を差し伸べてくれる。東日本大震災の次の起点は、コロナ禍にしたい。



いないのではなく「言えない」だけ



加藤 麻衣

(盛岡市議会議員)

略歴

- 2017年 岩手大学教育学部卒業
- 2018年 いわてレインボーマーチ旗揚げ
岩手県でプライドパレードを初開催
- 2019年 盛岡市議会議員選挙当選

私が岩手の学校教育に期待するのは、「LGBTQ+の子どもたちを包摂すること」です。

新聞やテレビなどで、「LGBT」という言葉に出会ったことはありますか？または、「性的少数者」や「性的マイノリティ」、「セクシュアルマイノリティ」という言葉はいかがでしょう？近年、これらの言葉がメディア等で頻繁に取り上げられるようになりました。そのため一度は見聞きしたことがある方は多いと思います。ここで一旦、意味を確認しましょう。

まずは「LGBT」。これは、Lesbian(レズビアン¹)、Gay(ゲイ²)、Bisexual(バイセクシュアル³)、Transgender(トランスジェンダー⁴)の頭字語です。Heterosexual(ヘテロセクシュアル⁵)やCisgender(シスジェンダー⁶)ではない人たちの総称として使われています。この言葉はアメリカにおける、同性愛者やトランスジェンダーの人たちの社会運動から生まれました。1980年代はGL、フェミニズムの影響を受けLG、バイセクシュアルやトランスジェンダーの人たちとも連帯し、1990年代にLGBTという言葉になりました。ちなみにこのような「LGBTの人たちの社会運動の歴史」を知りたい方におすすめなのが、ジェローム・ポーレン(著)、北丸雄二(翻訳)の『LGBTヒストリーブック 絶対に諦めなかった人々の100年の闘い』(サウンズブックス社、2019年)という本。大人が読んでも非常に勉強になりますが、もともと子ども向けの本なので、図書室や保健室等に置いておきたい一冊です。

意味の確認に戻しましょう。2つ目は「LGBTQ+」。レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェ

ンダーの人たち以外にも、多様な性のあり方を生きる人たちがいます。「Q」と「+」はその人たちの存在を表しています。QはQueer(クィア)とQuestioning(クエスチョニング)の頭文字。もともと「クィア」は、ゲイやトランスジェンダーの人たちに対する蔑称でしたが、彼女彼らはそれを逆手に取り、「多様な性のあり方を生きる人たちを包括する言葉」として肯定的に使うようになりました。「クエスチョニング」は自分の性のあり方が不明、あるいは意図的に不明にしている人を意味します。「プラス」はIntersex(インターセックス⁷)やAsexual(アセクシュアル⁸)をはじめ、多種多様な性のあり方を生きる人たちを表しています。より具体的に知りたい方におすすめなのが、アシュリー・マーデル(著)、須川綾子(翻訳)の『13歳から知っておきたいLGBTQ+』(ダイヤモンド社、2017年)という本。LGBTヒストリーブック同様に子ども向けの本ですが、大人も読んでおきたい一冊です。

最後は「性的少数者」、「性的マイノリティ」、「セクシュアルマイノリティ」。それぞれ表記は若干異なりますが、意味はLGBTQ+とほぼ一緒です。ただ、少数者やマイノリティと表記する場合、LGBTQ+の人たちが置かれている「社会的に脆弱な立場性」が強調されます。日本では法律等によってLGBTQ+の人たちの権利がほとんど保障されておらず、人生の様々な場面で困難に直面しがちです。その事例をまとめた『LGBT困難リスト』がLGBT法連合会のホームページに掲載されているので、ぜひ一度ご覧ください。このリストでも取り上げられているのが「子ども・教育」に関する困難。私が岩手の学校教育に期待する

「LGBTQ+ の子どもたちを包摂すること」は、その困難を解消することとイコールです。

LGBTQ+ の子どもたちが直面する困難は大きく分けて二つあります。「性的指向」に関することと、「性自認」に関することです。性的指向 (Sexual Orientation) とは、恋愛感情や性的欲求が、どんな性のあり方をしている人に向かうかを示す概念。分かりやすくするために「好きになる性別」と言い換えることもあります。異性を好きになる人をヘテロセクシュアル、同性を好きになる人をレズビアンやゲイ、バイセクシュアルとすることができます。性的指向について考える際、アセクシュアルなど他者に恋愛感情や性的欲求を抱かない人たちのことも忘れてはいけません。ちなみに、ヘテロセクシュアルの対義語は「ホモセクシュアル (Homosexual)」ですが、同性愛が犯罪や精神疾患とみなされていた時代の言葉なので、現代ではあまり使いません。

性自認 (Gender Identity) とは、自分の性別をどのように認識しているかを示す概念。分かりやすくするために「こころの性別」と言い換えることもあります。この表現は賛否両論あります。人間は生まれた時に女か男の性別を割り当てられます。「(社会的マジョリティのため、) 生まれた時に割り当てられた性別に違和感なく生きる人」をシスジェンダー、「生まれた時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きる人」をトランスジェンダーとすることができます。性自認に関連して、「性別表現 (Gender Expression)」という概念にも触れておきます。性別表現とは、服装や髪型、持ち物、一人称、言動、仕草などで性別を表現することです。ちなみに、性別表現から性自認や性的指向は推測できません。その逆も然り。

これらの概念は干渉し合わず、独立しています。

もしも子どもたちから「同性を好きになって悩んでいる」、「恋話の時に居心地が悪い」、「“ホモ・オカマネタ” がつらい」、「性自認に合った制服を着たい」、「親に理解してもらえない」といった相談が寄せられたら、岩手の学校教育現場はどれほど対応できるのでしょうか？もしまだ対応が難しい状態であれば、平成 27 年に文部科学省が出した『性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について』という通知や、いのちリスペクト、ホワイトトリボン・キャンペーンがとりまとめた『LGBT の学校生活に関する実態調査 (2013) 結果報告書』などを踏まえ、早急に支援体制を整えることも期待します。

おわりになりますが、LGBTQ+ の子どもたちは昔も今もこれからも存在します。しかしその存在は非常に見えにくいです。LGBTQ+ の子どもたちの存在を踏まえ、改めて学校教育について考えると、さまざまなことが見えてくると思います。それらを社会全体で共有しつつ、LGBTQ+ の子どもも大人も自分らしく過ごせる空間を広げることができたら、またそれに貢献することができたら、私はとても甲斐を感じます。

- 1 女性同性愛者
- 2 男性同性愛者
- 3 両性愛者
- 4 生まれた時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きる人
- 5 異性愛者
- 6 生まれた時に割り当てられた性別を違和感なく生きる人
- 7 正式名称は Disorders of Development または Difference of Development。性に関する身体の特徴が、一般的なものは違う発達をする様々な状態。
医学用語では「性分化疾患」。
- 8 他者に対して恋愛感情や性的欲求を抱かない人



オピニオン

OPINION

岩手教育総合研究所・所長
佐藤 淳一岩手の子どもたちの
希望ある高校進学を全県で考えよう

岩手県教育委員会から 2020 年 2 月に示され、今年策定される予定の「県立高校再編計画後期計画案」に対して、さまざまな立場からさまざまな意見が出されている。将来の岩手の子どもたちが、希望を持って学ぶことのできる高校再編が実現されることを願う。

まず、前提として考えるべきことは、少子化の急激な進行を背景に、再編計画の策定自体は避けられない状況だということだ。しかし、前期計画の基本線をそのまま踏襲した場合、小規模校の統廃合が一層進むことになり、その地域の子どもの進路保障や教育の機会均等の保障ができなくなる可能性がある。従って、後期計画の検討は再編対象となる地域のみならず、全県的な視野から慎重に検討されるべき重要な課題であると考えます。

次に、再編計画を策定する場合に考慮すべきと考えられる観点だが、

①小規模校を機械的な基準で統廃合するのではなく、可能な限り地域に通学可能な高校を残すこと。

②学びの充実や小規模校存続のためにも、大規模校も対象とし全県的な視野で学科等の拡充や教職員配置の工夫を行うこと。

③再編によって、ブロックごとに地域産業と関連する学科や新しい学科（例えば、総合的な水産関係の学科、林業・伝統工芸を関連させた学科、産業の変化に対応する先進的な学科、防災について震災の経験も踏まえ学べる学科等）を設置するなど、子どもたちが興味関心を持って進路選択ができるようにすること。

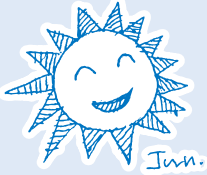
④岩手で豊かな学びを体験した子どもたちが、将来、地域で働き、生活していく選択ができるよう全県的な応援の形をつくること。

などが考えられる。

仮に、今回の再編計画案を白紙に戻して前期計画を踏襲する形で後期再編計画が策定された場合、小規模校の統廃合が進んで通学が困難になる地域が増加していくばかりでなく、新設校や新しい学科の設置・充実という方向性の実現も難しくなるのではないかと心配される。小規模校の統廃合が進めば、今後、その地域で働き、生活していく子どもたちが減少することも考えられ、地域崩壊につながることも危惧される。

従って、現在提示されている再編計画の後期案を基本に、全県的な視野から検討し、「将来の岩手の子どもたちがより幸福になるための前向きな再編計画」となるように、県民が知恵を出し合うことが必要ではないかと考える。





教室の窓から



片道72kmの冒険!?

5校での講師経験をしたのち、1985年4月に、新採用としてのM市のO中学校に赴任した。最初に担任したのは2年生だったが、初めての担任で、1年は無我夢中で過ぎていった。そして2年目は、持ち上がりの3年生担任となった。この時、私のクラスの副担任を受け持ってくれたのがS先生だった。

そのS先生から1学期の中盤ごろ、「クラスにまとまりがないから夏休みにレクを企画しろ」と言われた。学級レクの企画の経験がなかった私が、「どんなレクがいいですか?」と聞くと、「そうだなあ、1日かかって自転車で行ける一番遠いところまで行ってキャンプをしてみろ」とのこと。「例えばどこがいいですか?」と重ねて聞くと、「湯田あたりはどうだ」との答え。さらに、「3年生の夏休みって受験勉強に響くとか反対も出るんじゃないですか?」と聞くと、「自由参加で希望者だけでいいからまずやってみろ」との答え。私は不安なまま、「先生もついて行ってくれますよね?」と確かめると、「俺は車で行くから担任は生徒たちと一緒に自転車で行くこと」とのことだった。

こうして、夏休み中の8月1日、30℃を超える暑い日に学級レクが決行された。当時、雫石から沢内に抜ける「山伏トンネル」は開通しておらず、途中つづら折りの山伏峠を登る、M市～雫石～沢内～湯田までの片道約72kmを自転車移動する1泊キャンプが行われた。参加者は45人中30人前後だっただろうか。ちなみに、私の自転車はいわゆる「ママチャリ」で、生徒たちの中には、10段変速の自転車の生徒もいて、私が片道6時間かかったのに対して、3時間ほどで着いた生徒もいたようだった。

今であれば、校長からも教育委員会からも許可が下りそうにない企画だが、実施できたのは、多くの支えがあったからだ。S先生の力添えはもちろんだが、保護者の協力にも大いに助けられた。採用2年目の私を頼りなく思ったのか、学級PTAの準備会を何回か開いて、「私たちもついて行って調理の手伝いをしてあげるから」とか「パンクした自転車があったら、軽トラに積んで行くから心配しなくていいよ」などと本当に温かく見守ってくれたし、批判的な意見はほとんどなかった。

私も、迷惑はかけられないと思い、下見を2回行った。1回は家族と一緒に車で行ってみて、経路の略地図を手書きで作った。2回目は、班長会メンバーの何人かを（これも今は認められないと思うが）車に乗せて、道順を教えながら、確認してきた。こうして、無事にキャンプは行われたのだった。

では何故、S先生は一見無謀とも思える行事を提案したのだろうか。当時は、その理由がわからなかったが、今は何となくわかるような気がする。それは、たぶん「クラスがまとまらない状況の中で、協力しようと呼びかけても生徒たちが自ら行動することはなかなかできない。だから、自転車で長い距離を移動して疲れた状況の中で、テント設営や、薪拾いや、火おこしや、夕食の調理など、協力なしには何もできないということを共通体験させよう」ということだったのだと思う。

2学期が始まり、間もなく文化祭に向けての取り組みが始まったが、1学期とは違い、生徒たちどうしが自然に協力をし合う場面が、あちらこちらで見られるようになっていた。私は、説得力のない協力の呼びかけだけでは得られない、「同じ釜の飯を食う」という状況の中で得られる関係性や信頼性の意味を、この学級レクを通して学んだのだった。(J)



IWATE 教育総研ニュースはホームページにも掲載しております。
<http://www.iwakyoso.gr.jp/soken/index.html>



QRコードは
こちらから!

